

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：37104

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21792289

研究課題名（和文） 小児がん患児をもつ父親のケアガイドラインの開発

研究課題名（英文） Development of Care Guidelines for Fathers of Childhood Cancer Patients

研究代表者

納富 史恵 (NOUDOMI FUMIE)

久留米大学・医学部・講師

研究者番号：60421301

研究成果の概要（和文）：

子どもががんであると診断された父親は、子どもを亡くす恐怖を体験した後、プラス思考に切り替えたり、明るく振る舞うなどの努力をする中で辛い状況に何とか持ちこたえようとしていた。その際、父親は主に問題焦点コーピングをとる傾向にあった。また、小児科病棟に勤務している看護師は、父親に対する言動統一や情報提供、気持ちを表出させる、父親へのケアの促や父親が行ったケアを認めるなどのケアを意識して行っていた。

研究成果の概要（英文）：

A study of fathers whose children were diagnosed with cancer revealed that they first experienced fear of losing their child, and then tried to deal with the situation by switching to positive thinking and conscious cheerfulness. In the course of these efforts, they tended to adopt a mainly problem-focused coping strategy. The nurses in the pediatrics ward consciously offered nursing support to the fathers, using unified language and coordinated action among the nursing staff, offering information to the fathers, prompting the fathers to express their emotions, encouraging the fathers to care for their children, and voicing acknowledgment of the care they provided.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：小児がん、父親、ケアガイドライン

1. 研究開始当初の背景

子どもの癌の診断は予期しない出来事であり、家族は危機的な状況に陥る。家族は患児の入院によりそれぞれの役割を変化させながら、危機的な状況に対処しようと努力している。長年、看護師は患者のみを中心に考え

るあまり患者や医療従事者に都合のよいように家族を捉えたり、家族の状況や立場を十分考慮せずに“患者の病状安定・回復のために”と家族に協力を求める傾向があった。しかし、家族を患者の背景として、あるいは患者にケアを提供する資源として活用しよう

とする視点から家族をケアの対象として捉える視点への変換の必要性が叫ばれるようになってきている。そのため、家族に対する研究が最近急速に増えつつある。しかし、これらの研究は、母親を対象としたものがほとんどで、父親を対象とした研究はあまりみられない。

一方、近年の家族形態や機能は変化しており、共働きや片親の増加、加えて核家族化がすすみ、子どもが病気という場合にすぐに手伝ってくれる人が近くに存在せず、父親の面会回数や週末の付き添いの機会が増加し、病院で父親の姿を見ることが多くなった。父親は、母親が患児に付き添うことで、母親が不在となった家庭での役割を担い、慣れない家事と仕事の両立に苦戦し、父親の生活は大きく変化していることが考えられる。その上、病児に付き添う母親のサポート的な役割を求めることが多く、父親の肉体的・精神的負担が大きいことが予測される。

2. 研究の目的

小児がん患児が入院することでもたらされる父親の体験やストレスに対するコーピング行動、更に小児科病棟に勤務する看護師の父親へのケアに対する認識や実際のケアを明らかにし、小児がん患児を持つ父親へのケアガイドラインの考案を目的とする。

3. 研究の方法

<平成 21 年度>

(1)調査対象:全国の大学病院(135施設)・国立病院機構(143施設)・500床以上を有する病院(192施設)の計470施設よりランダムにサンプリングした病院に入院している慢性疾患(小児がん含む)患児の父親・母親とする。

(2)調査方法(アンケート調査)

①データ収集の流れ

コーピング尺度⇒アンケート調査⇒データ入力・分析

②アンケートの方法:研究者が、病院長・看護部長・小児科医長・小児科師長宛に研究のお願いの文書を出し、承諾が得られた病院にアンケートを郵送する。アンケートは、小児科師長から父親に配布してもらう。アンケート記入後は各自で研究者宛てに郵送してもらう。

③分析方法:SPSS統計ソフトを用いて分析を行う。

<平成 22 年度>

1.小児がん患児の父親の体験を明らかにする。

1)調査対象:主治医あるいは病棟師長より研

究許可の同意が得られた九州圏内の小児科病棟に入院している小児がん患児の父親10~15名前後(平成21年度に6名の小児がん患児の父親に調査済み。この6名も分析対象者に含める。)

2)調査方法:入院前・診断時・治療中の各段階での父親の気持ちや生活についてインタビューガイドを作成し、面接調査を実施する。

3)分析方法:修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

<平成 23 年度>

1.小児科病棟に勤務する看護師の父親に対するケアへの認識やケアの実際を明らかにする。

1)調査対象:九州圏内の病院の小児科病棟で小児がん患児や家族のケアに携わっている看護師10~15名前後

2)調査方法:小児がん患児の父親に対するケアへの認識や実際に行っているケアについてインタビューガイドを作成し、面接調査を実施する。

3)分析方法:KJ法を使用する。

4. 研究成果

<平成 21 年度>

全国の31施設に慢性疾患で入院している子どもの両親164名から質問紙の解答を得た。両親は似通ったコーピング行動を取る傾向にあった。状況要因では、父親は、<疾患名><付き添い>、母親は<疾患名><付き添い><家族形態><子どもの入院経験>の違いがコーピング行動の違いと関連していた。また、小児がんの子どもの父親は、腎疾患、神経・筋疾患などががん以外の子どもの父親よりも「状況が良くなるように努力する」など『問題焦点コーピング』をとる傾向にあった。更に、がんの子どもの母親は、がん以外の子どもの母親よりも『情緒的支援コーピング』をよる傾向にあった。

<平成 22 年度>

初発入院である小児がん患児の父親は、子どもの体調不良から診断がつくまでの期間【病名確定までの眠れない日々】を体験し、がんであると診断が確定することで、【覚悟せざるを得ない死】【受け入れがたい現実】である<子どもを亡くす恐怖>を感じていた。この時期、父親は本やインターネットを使って、病気や治療に関しての【命がけの情報収集】を行っていた。父親は病気や治療に関して情報収集した後、治療に関しては医師にお任せするしかないという【医師に託す】という対処行動をとっていた。また、医師より病気に対する治療法があり、治る確率が高いという

【高治癒率提示に一安心】していた。父親は、<子どもを亡くす恐怖>を体験しながら、辛い現実を前向きに捉えようと努力する【プラス思考に切り替える努力】や何とか現状を乗り切るために【明るく振る舞う】や家族や周囲の人に弱いところを見せず、父親自身がしっかりしようとする【気丈さを演じる】という<持ちこたえる努力>をしていた。また、同時に子どもが抗がん剤の治療をする中で起こってくる脱毛や嘔吐などの副作用を見ることで【副作用からの病名受け入れ】を体験していた。治療を継続していく中で、医師からの【治療順調の保証】によって父親は大きな安心感を得ていた。【職場同僚の理解・励まし】【あどけないきょうだい児】【頑張る病児からのエール】という支えによって、父親は【家族の絆の深まり】【当たり前の有難さ】【優しさ・強さを身につける】という<人間的成長の実感>を体験していた。

<平成 23 年度>

小児科病棟に勤務している看護師は、父親へのケアの必要性を認識しながらも、土日や夜遅くにしか面会に來れない父親よりも、実際に関わる時間が長い母親や患児に目が向かい、父親に対してなかなか看護援助が及ばない現状があった。しかし、このような現状の中でも、看護師は医療者間の【言動を統一する】、普段の子どもの生活を伝えていくなどの【情報提供】、信頼関係を築くための【声かけ】、医師と対話するための状況を作るなどの【医師との橋渡し】、患児の病気の説明の際に面会時間の遅い【父親の都合に合わせる】、父親の話聞くなどの【気持ちを表出させる】、なんでも話やすい雰囲気を作るなどの【話やすい雰囲気づくり】、患児に付き添っている父親にご飯の差し入れをしたり父親がお風呂にはいれるようにお風呂の調整をするなどの【病棟生活への配慮】、父親が行ったケアで患児がとても喜んでいたなどの【行ったケアを認める】、頑張っていますねなど【ねぎらう】こと、日々の患児のケアに関わってもらおうように【ケアを促す】という関わりを行っていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①納富史恵、兒玉尚子、藤丸千尋、入院中の慢性疾患患児を持つ両親のコーピング行動、

小児保健研究、査読(有)、69 (6)、2010、756-763.

②納富史恵、兒玉尚子、藤丸千尋、小児がん患児の父親が困難な状況を受け止めていくプロセス、日本小児看護学会誌、査読(有)、20 (3)、2011、59-66.

[学会発表] (計 2 件)

①納富史恵、兒玉尚子、藤丸千尋、入院中の慢性疾患患児を持つ両親のコーピング行動-父親と母親の比較-、日本小児看護学会、2009、札幌.

②納富史恵、兒玉尚子、藤丸千尋、小児がん患児の父親が困難な状況を受け止めていくプロセス、日本小児看護学会、2011、埼玉.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

納富 史恵(NUDOMI FUMIE)
久留米大学・医学部・講師
研究者番号：60421301

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし